目次

巻頭言：赴任５年を経過して　1

Ⅰ　教室人事　3

Ⅱ　教室員のひとこと　4

Ⅲ　診療の集計

1.　外来および入院　10

2.　手術　11

Ⅳ　研究業績

1.　論文発表　12

2.　学会・研究会への参加　13

3.　研究助成　17

4.　学位　17

Ⅴ　教育関連の活動

1.　学生実習　18

2.　卒後臨床研修　18

3.　講演・講義　18

4.　セミナーの開催　19

5.　小児外科・病理カンファレンス　19

6.　抄読会　21

Ⅵ　その他　21

編集後記　22

＊ 表紙は Pontifical Angelicum University（ローマ）

巻頭言： 赴任５年を経過して

獨協医科大学越谷病院
小児外科教授　池田　均

2000 年４月に赴任してまる５年が経過しました。お蔭さまで大過なく、一つの節目を迎えることができました。学内の教職員の皆様は勿論、地域の先生方をはじめ、関係各方面の皆様のご支援の賜物と心より感謝申し上げております。

赴任１年目は少ないスタッフでのスタートを余儀なくされましたが、２年目からは群馬大学病態総合外科（第１外科）ならびに東京大学小児外科からの継続的な医師の派遣を得ることができました。派遣されてきた医師は２年ないし１年の期間で交代しておりますが、それぞれの医師から当教室が学んだことは勿論、それぞれの医師もここでの経験をもとに新たなキャリアを展開させていることは本当に喜ばしいことと思っております。

さて、５年間を振り返りますと、徐々にではありますが、時代に即応すべく診療内容にもいくつかの工夫や変更を行ってまいりました。幸い、赴任直後に鏡視下手術用の器具一式を購入してもらうことができましたので、腹腔鏡、胸腔鏡を用いた低侵襲かつ整容的な手術の実施に積極的に取り組んでまいりました。これは成長しつつあるこどもたちの身体や心に大きな傷あとを残さないようにとの願いからです。同様な思いで肥厚性幽門狭窄症やヒルシュスプルング病などの術式も変更しました。また、いくつかの疾患（状態）では手術適応そのものに制限を加えました。そのため手術数は当初、減少する結果となってしまいましたが、2003 年以降は回復し徐々に増加傾向にあります。

研究も多忙な日常の合間を縫って少しずつではありますが、継続してまいりました。臨床研究が主ですが、基礎研究でもデータを出しております。国際誌にも論文を発表しておりますし、2004 年は３名が国際学会で研究成果を発表してまいりました（研究業績参照）。また、卒前、卒後の教育にも教室員全員が熱心に取り組んできました。これはなかなか直ぐには結果の出ない地道な作業ですが、本学出身者から繊細かつ高度な小児外科医療に取り組んでみたいとの希望者が出てくることを期待しております。

私は赴任時に前任の長島金二教授から「急患は断ったことがない」と申し送りを受けました。これは「地域に貢献すべく手を抜くな」との意味の激励と理解しておりますが、もともと地域で小児外科を担当する医師は限られておりますので、大学病院とはいえ訪れるこどもたちすべてに対応しようとのつもりで診療を行っております。教室員にもその旨、徹底しておりますが、万一、当方の対応等に不手際があればいつでもご指摘いただきたく存じます。

直ちに現場に還元し、ややもすると安穏と停滞しがちな組織内の改善、改良の一助とするつもりです。このことは地域でお話をさせていただく機会には、常に申し上げていることです。

さて、これからの５年、その目標について最後に述べさせていただきます。現在、埼玉県東部地区の小児救急医療研究会の立ち上げを提案させていただいております。これは 2005 年中に実現させるつもりで皆様のご協力をお願いしておりますが、研究会を通じて地域の小児救急医療がより充実したものに発展することを願っております。また、昨今、産科医の不足や公立病院産科病棟の閉鎖などの話をあちこちで耳にします。小児外科医は周産期医療チームの一員ですから、地域の産科医や小児科医との連携もこれまで以上に深めていきたいと考えております。一方、学内では質の高い研究を行うこと、卒前、卒後教育では魅力ある小児外科を伝えることを今後はより明確な目標として意識したいと考えております。

メディアの騒ぎではありませんが、変革を焦って急進であっても消耗するだけです。しかしながら、変革を嫌い守旧であっては消沈することも間違いありません。バランスよく確実に変化しながら成長を続けたいと願っております。

2004.9.26
イタリア小児外科学会（ローマ）にて

Ⅰ　教室人事

2004 年３月 31 日、岡邨香織助手が退職した。岡邨香織君は再び一般外科の修練を目的に群馬大学大学院病態総合外科（第１外科）の教室人事で済生会前橋病院に移動となった。

４月１日、山岸純子君が臨床研修医として採用になり、４月 30 日付けで学内助手に採用された。山岸純子君は群馬大学第１外科からの派遣で岡邨香織君と交代に済世会前橋病院外科からの移動である。また、臨床研修医の木崎義行君も４月 30 日付で学内助手に採用となり、５月１日より高知県高知市の近森会近森病院へ一般外科の研修を目的に学外派遣となった。さらに育児休暇中であった学内助手藤野順子君は４月１日より職場復帰し、同日付で一般外科の研修を目的に八潮中央総合病院へ学外派遣となった。したがって、５月１日からは池田、石丸、高安、大谷、山岸の５名体制となった。

非常勤講師はこれまでどおり、群馬県立小児医療センター形成外科部長浜島昭人先生と社会保険船橋中央病院形成外科部長蓮見俊彰先生に形成外科の外来診療、手術、教育を担当していただいた。さらに群馬県立小児医療センター外科部長黒岩　実先生と埼玉県立小児医療センター外科医長内田広夫先生には引き続き非常勤講師としてそれぞれ鏡視下手術の教育と研究指導を担当していただいた。

尚、獨協医科大学胸部外科の荒木　修君を１月１日から４月 30 日まで、また越谷病院外科の奈良橋健君を３月１日から４月 30 日まで小児外科の研修に迎えた。

2004.4.2 病院前

Ⅱ　教室員のひとこと

「新臨床研修制度」

石丸由紀

アテネオリンピックで日本が活躍した2004年。当科では手術件数も順調に400件を超え、多忙ながらも充実した年であったと言えると思います。特に新生児手術症例が多く、管理に難渋しながらも病棟のスタッフと協力し、できる限りの治療を行うことができたと考えています。私の受け持った症例では、悪性腫瘍（卵黄嚢腫瘍）の思春期の女児例、久々の小腸閉鎖の新生児、臍帯ヘルニアの重症新生児などが特に印象に残る症例です。

2004年は研修制度が新しくなり、当院も26名の臨床研修医を迎えました。当院のカリキュラムでは、小児外科は選択外科の１つとして４週間のローテーション期間があります。すでに11名の研修医が当科を研修しました。新しい研修制度の１年目ということもあり、それぞれの研修医と接して思うことは、このような研修制度の中ではいかに自分のスキルを上げるかは自分自身が意識して積極的に学ぶ姿勢を持たないといけないということです。

これまでは卒業後は希望の医局に入局し、１年目からその科の専門医となるべく教育されてきました。途中ローテーションの期間はあれ、２年間の研修の後はその科の助手としてベッドサイドの中心的な役割を果たしていくケースが多かったと思います。しかしながら、新しい研修制度では２年間のスーパーローテーションを終えて希望の科に入局しても、これまでの研修医と同様の教育を受け直す必要があります。当院のような大学病院では、高度医療を経験することはできますが、厚生労働省の目指すプライマリーの診られる医師を育成するにはそのような患者が少ないことが問題となります。また、診療科の数が多いため１つの科の研修期間が短く、厚生労働省の示す経験すべき疾患や手技が十分に経験できない可能性もあります。このような中で大学病院での研修を希望した研修医は、意外にも意識の高い医師が多いように感じます。初年度でもあり、市中の研修病院での研修の実態についての情報が少ないということもあるかもしれませんが、そういった病院で研修する者と比較して自分の経験が少ないことに危機感を抱いているのではないでしょうか。そういった意味では、今の研修医はいい意味で緊張感があるように思います。

新しい研修制度の研修医と接する機会が多くなってきて思うことは、臨床医のやりがいというものは、自分の考えた治療方針が功を奏し、患者が無事に退院していけることである、ということです。小児外科は主に刻々と変化してゆく小児の急性期を扱う科であり、そういった意味では自分の行った治療の結果が比較的早期にわかりますが、その代わり、余力のない小児の患者に対し、先回りして病態を考慮した治療を行っていく必要があるとも言えます。それは、適切な判断が遅れれば取り返しのつかない状態に陥る危険があるということに他な

りません。しかし、自分の患者、特に重症の小児が回復してゆく過程を経験していくことは、この上ない喜びと達成感につながると思います。このような、小児外科での臨床研修の醍醐味を、短期間ではありますが経験させたいと考えています。

昨今、病院の収益の減少が話題になっており、当院でもいかに高い医療水準を保ちながら収益を上げるかということが問題になってくるのではないかと思います。不必要な支出を避けることはもちろん、医療連携を通じて紹介医や患者に安心して受診していただける環境を整えてゆくことが必要です。医は仁術であり、患者を主体とした医療の提供に加え、患者の立場に立った医療者の対応が重要です。医局数も医師も多い大学病院ではこういったことに対する教育が難しく、医学的には適切であっても、患者の信頼が得られずに問題となるケースがみられます。病院の経営に関わらない私たちができることは、真摯に患者とその疾患に向き合って、患者の信頼を得てゆくことだと思います。研修医は総合カリキュラムの中でこういった講義を受けると思いますが、実際にローテーションにでて、いろいろな科のいろいろな医師を見て、どのような患者面接がよいかを学んでゆきます。上級医は研修医に見られていることも意識して、自分の態度を振り返ってみる必要があると思います。

長くなりましたが、新しい臨床研修医制度が始まった年に考えたことを綴りました。

「診るということ」

高安　肇

「がらっ」という音とともに外来診療室の引き戸が開く。「子育て相談みたいな」内容から手術を必要とする緊急事態まで訴えは様々だ。

慣れないうちは診断がつくまで焦燥感にかられ、イライラしたり閉口することもありました。しかし、よく考えてみると、状態や表現はどうであれ「不安だから、困っているから」医者にかかるのである。傾聴するだけで解決されることもある。原因を追及すること（診断）も大切だが、早期に症状を軽減し、不安をとりのぞくことが重要で、医師の自己満足に終わってはいけない。「なにかしら、お役に立たないといかん」のです。

多彩な背景と病態を持った子供達に、それを瞬時に見分けることにより適切な対応をする、というのはなかなか大変なことであるが、話がすすまないと困るのは医者ではなく子供達である。そこを勘違いしやすい。

外来診療を通じて、それを解決する方法を二つ見つけることが出来ました。一つ目は「笑顔」、最終的に自分が笑顔を見せられるように、その場をおさめようと努力すれば（これが大変）、おのずと、その途中経過で問題が解決されていることがある。患児や保護者の方の不安を把握することが出来る。

二つ目は「触れる」ということ、これにより距離は格段にせばまり、不思議と相手の困っているところが実感、共感出来るようになる。触診、打診、聴診が重要であるとされてきた所以です。そして子供の頭を撫でてあげることから診療が始まるのだと実感しています。

とかく検査データに振り回されがちな我々「新人類医師」にとり、ごく当たり前のような上記のことは医学生の頃からさんざん言われてきたもので、最近、かなり強烈に再認識しています。

もちろん、そうした「当たり前」を実行しにくい背景もある。不安をあおる不正確な医療報道、事故や訴訟に備えて？増える一方の書類作業、理屈上は365日24時間ベストの医療が可能となり、ますます拘束感や緊張感から解放されず気分転換や「リセット」が難しい過酷な労働条件、採算性重視や不当な医療費抑制による現場のひずみ、迷走する卒後教育制度にふりまわされる大学病院の人材不安定、少子化や核家族化による過剰な子育て不安、しかし、これらは個人で一朝一夕に解決出来るものではない。

日々、思いや気持ちを新たにして、診療に取り組めるよう自己管理をすること、目の前の仕事に対する努力を惜しまないこと、自分の診療に自信を持てるように向上心を持ち続け、時には自分に厳しく研鑽をつむことなど、やはり「当たり前」な心掛けで解決されることも多いのだと思う。

今年、渡欧留学をさせていただきます。外から日本をじっくりと見てきます。

付・SIOP（国際小児腫瘍会議）報告

前任の内田先生より引き継いだ実験の結果を９月下旬にSIOP（国際小児腫瘍会議）で発表しました。未熟児集中治療における高濃度酸素投与が肝芽腫における発ガン危険因子の候補となる、という知見を根拠に未熟児における肝芽腫発生危険率上昇に関する研究を、ラットのモデルを用いて行った結果です。

会はノルウェーのオスロにて行われました。オスロはフィヨルドに面した美しい港町です。ヒースローで乗り継ぎオスロには深夜に到着しました。学会では「日本の医療は確実に三流への道を歩み始めている」という思いを強く持ちました。米国の医療レベルは周知のごとくですが、ヨーロッパは交流が盛んで、データを共有し、大きな解析により確実な結果を出し、新しい治療の試みも積極的に行われています。またインドや中国からの発表も、内容は新しくないものの、巨大な人口をバックに、沢山の症例の治療を行った経験を発表しています。このままでは、日本は見向きもされなくなるでしょう。現在の日本の医学に求められるものの一つはシステムの再編、特に行政と学会の指導に基づいたデータの管理と治療方針の標準化でしょう。例えば小児癌の登録事務は、ボランティアの医師が臨床の合間にすべての業務を行っています。そこには義務も報酬もありません。登録データを用いた研究や発表の主導権、

運用をめぐって、トラブルを生じることもあると聞いています。そういう事情のためか、登録に参加しない機関や、登録以上の仕事には手をつけられない事務局が出てきます。ちなみに米国では年に数億の予算が癌登録に投じられ、登録専門の機関やスタッフが存在し、また登録の義務があります。現在、遺伝子や組織も同時に管理されバイオバンクとして機能し始めています。そういう検体を利用して、新薬の開発研究などが行われているとのことでした。

初日の夕方にはオープニングセレモニーで女王陛下にご挨拶をいただいた後、ノーベル平和賞受賞式会場で有名な市庁舎でのパーティーを楽しみました。２日目の夜にはオスロの小児外科のボスのセッティングで各国の小児外科医達とともにノルウェーサーモンのステーキをいただきました。

３日目の午後は、オスロの国立大学病院（前頁写真）を見学しました。驚きと溜息の連続でした。「コンセプトはヒーリングスペースです」の言葉のごとく、各廊下にかかる名画の数々、コックが常駐して、つねに出来たてを食せる各病棟のキッチン（下左写真）、日光の差し込む綺麗な廊下（下右写真）等々。小児病棟のキッチンでは「お母さんの味が恋しい」子供に母親が料理することも可能です。勿論、スタッフへの配慮もありました。広いスタッフルーム、ふかふかのソファー、どこでも飲める沸かし立てのコーヒー、羨ましい限りでした。福祉国家というお国柄により潤沢な資金があるにせよ「とにかく入院する方、働くスタッフを最も大切にした設計」であることを強調される事務の方の説明に感激しました。

３日間、オスロで過ごした後、帰りに留学を計画しているダブリンに立ち寄りました。留学予定の Our Lady’s Hospital for Sick Children はダブリン中心部南西に位置する病院です。小児外科の Puri 教授は日本でも著名で、しばしば来日されています。アイルランドは IT 革命に成功し、10 年弱で GDP が 80%のびた国です。景気の良いダブリンでは、方々に再開発の工事現場を見かけました。住居費も４倍に高騰しており、バブルがはじける前の日本を彷彿とさせます。最後の夜には Puri 教授のご案内で、パブを３軒「はしご」しました。アイルランドと言えばギネスビールとウィスキーで有名ですね。食事をとらず、酒を片手に語り合う、というのが正統なパブの楽しみ方だそうです。

大正の昔、私の曾祖父の代に医家を継がず作家となった高安月郊がイプセン（オスロの作家）の「人形の家」を日本に紹介し、月郊のかわりに医家を継いだ道成がイギリスとドイツで外科学を学び、帰国後に外科学会にて腸閉塞や腸重積の治療につき発表していることが「外科学会雑誌」や「小児外科」で紹介されています。また阪神大震災のおり倒壊した実家から渡欧記が発見されました。それから 100 年あまりを

経た現在、ひ孫の私が渡欧記を書かせていただいていることを不思議ながら嬉しく思います。最後に、今回の学会発表の機会をお与えいただいた教室の皆様、また実験をお手伝いいただいた病理部陣内睦男さん、実験助手の千年　絢さんに心より感謝申し上げます。

「ひくひと」

大谷祐之

私はひくひとである。ハードな当直になるということである。平和な当直など殆どない。「寝当直」なんて聞いたことがない。

当然、緊急オペの件数も多く、一晩に複数の手術になったことも何度もあった。その度に呼出を受けた上の先生に前立ちをして頂き、数限りなくお世話になった。▼以前に代診した外勤病院では、年に２名ほどしかいないと言う挿管患者が、私が行った時に２名いた。▼ERを始動した前院では明け交代まで外来患者がほぼ途切れなかったことがあり、当時１日患者数２位であった（１位は所属の部長先生）。▼小児科にも病棟Nsにも同様にひくひとと呼ばれる人々がいるもので、３人が揃う夜には「夢のコラボレーション」と囁かれている。

私は占いやジンクスといった類のものはあまり好きではない。それによって行動制限されるのはもったいないからである。しかしこれでもかと当たると、動物が行動を学習するように、体が憶えていくようになる。そしてそれは時として「洗車すると雨が降る」ような、ある意味マーフィーの法則的なつながりすら感じさせるのである。

まず美味い夕食をとってはいけない。ちょっと奮発して小児科の先生と寿司なんかとったりすると、到着して口に頬張る直前にベルが鳴る。▼学会準備や抄読会の最終煮詰めを「当直の夜に」と先まわすと、必ず緊急手術のあと、医局デスクの窓がうす明るくなり小鳥がさえずる。▼深夜に独り「君の瞳に...」なんて台詞で、あの娘にメール入れて待ってたりすると、返事は即、救外から来る。▼バイト病院の当直室にありがちないかがわしい本やビデオ、あれは本当に良くない。にんまり鑑賞なんかしようものなら確実に刺される。▼自分がひくひとだからと、夜中に備え食後に横になると、仮眠から入眠になる頃、着メロがフェードインしてくる。

結局のところ過去の経験からジンクス化していった結果、「当直」を意識し構えないで、普段眠る時間直前まで休まず仕事してる時が良いようである。

しかしそれは見方を変えると、様々な経験が出来るということにほかならない。先に連ねたネガティヴな学習ではない。プライマリーケアから自分で考えプランし診療、そしてそれを手術所見や翌朝のカンファからフィードバックする。また沢山の緊急手術から自分のスキルをブラシアップ出来ることは絶好のチャンスである。こうしてより多く経験できるということは、私は「ひくひと」ではなく「ついてるひと」と言えるのかもしれない。

これからも手術でオン・コールを御願いする諸先生方、予定外で協力を頂くコメディカルスタッフの方々、たくさん緊急を呼んでくるとは思いますが、私の経験、科の経験はもちろん、泣いている子供たちのために頑張りますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

「小さな大人」

山岸純子

『「子供」は「小さな大人」ではない』とは、学生の頃から小児科・小児外科を学ぶ際に言われ続けてきた言葉である。成人外科での２年間の研修を終え、昨年の４月に初めて小児の分野に足を踏み入れた私は、この言葉を痛感することとなった。どこが痛いのか、何が辛いのか、寂しいのか、お腹がへったのか。言葉にせず泣きわめく子供の姿に、当初は軽い嫌悪感さえ覚え、ベッドサイドを離れることが出来ない程に質問を浴びせかけてきたり、世間話に花を咲かせたりした昨年までの患者さんたちを懐かしくも感じた。また、可愛い笑顔に思わず抱き上げようとしながらも、この子供はあくまでも「患者」なのだと自分を戒め、必要以上のスキンシップを避けることもあった。一歩どころか二歩も三歩も引いた位置から、ただ仕事をこなす日々が続いていた。

しかし、いつの頃からであろうか。傍観気味の冷めた意欲が暖かさを増し、目の前の子供たちへの診療や態度に変化をもたらしていった。「研修医」というある意味で責任の少ない立場から、一人の「医師」としての重圧感を実感したためか、繊細で細やかな小児外科の分野に惹かれたためか、上司の先生方の上手なご指導のためか、はたまた子供たちの可愛らしさに私の心が負けたためか・・・。明確な理由は自分自身でも良く分からないが、現在の私は、小さな「患者さん」たちに精一杯の診療を捧げようと努力している。泣きじゃくる他科の子供をあやしたり、当直の夜は子供が寝付くまでベッドサイドで一緒に過ごしたりすることで、仕事に終われる日々、逆にこちらが癒されることもある。まだまだ知識も経験も未熟な私であるが、幼くして家族の元を離れ、懸命に生きようと元気になろうとしている小さな「患者さん」たちの力になれるよう、これからも学び励んでいこうと思う。

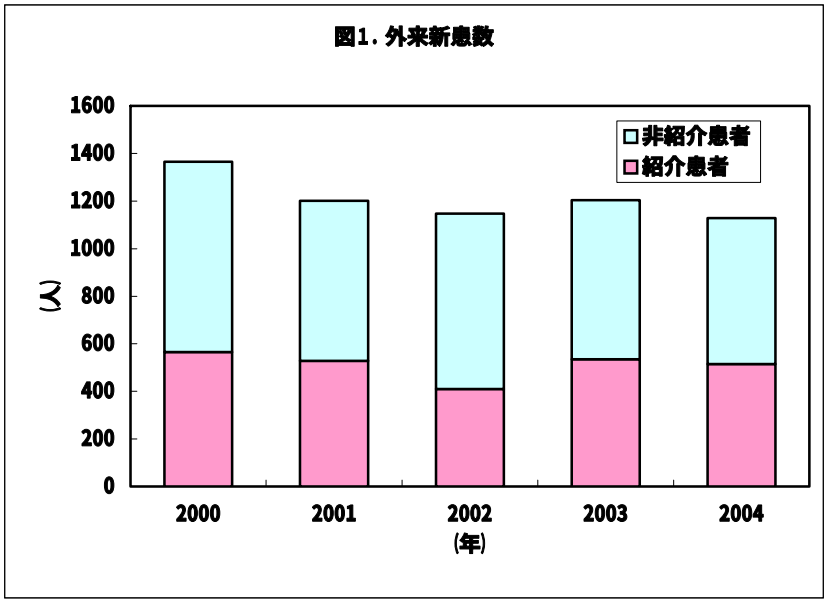
小児病棟に勤務することで、五体満足・健康に生み育ててくれた両親や家族に感謝の気持ちを持ったり、親子や家族のあり方について考えさせられたりと、医療以外のことについて思いをめぐらす時間を得ることもできた。悪性腫瘍の多い成人病棟とはまた違う有意義な時間を過ごしていると思う。

「子供」は「小さな大人」ではない。「大きな子供」の大人たち（私も含め）はいっぱいいるようだが・・・。

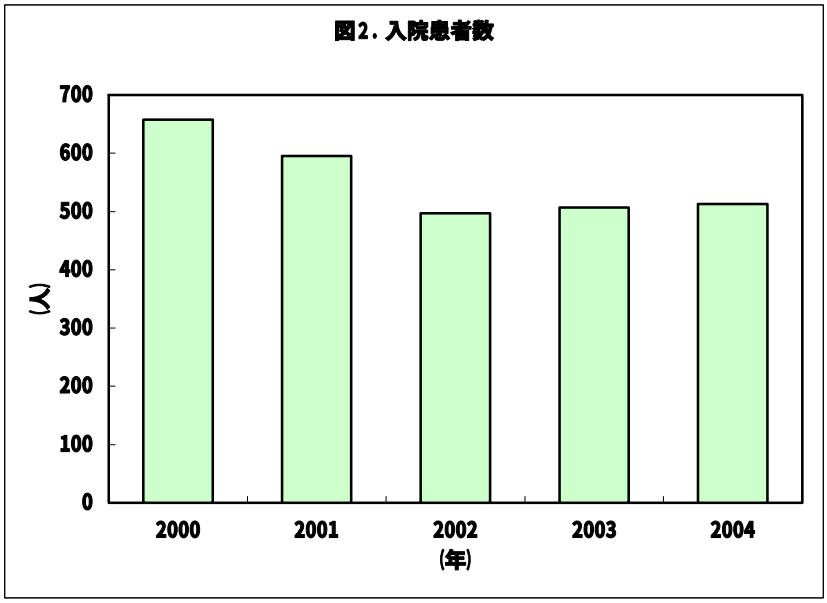
III　診療の集計

1.　外来および入院

2004 年の外来延べ患者数は 4901 名、うち新患数は 1129 名でその紹介率は 45.5%であった(図１)。

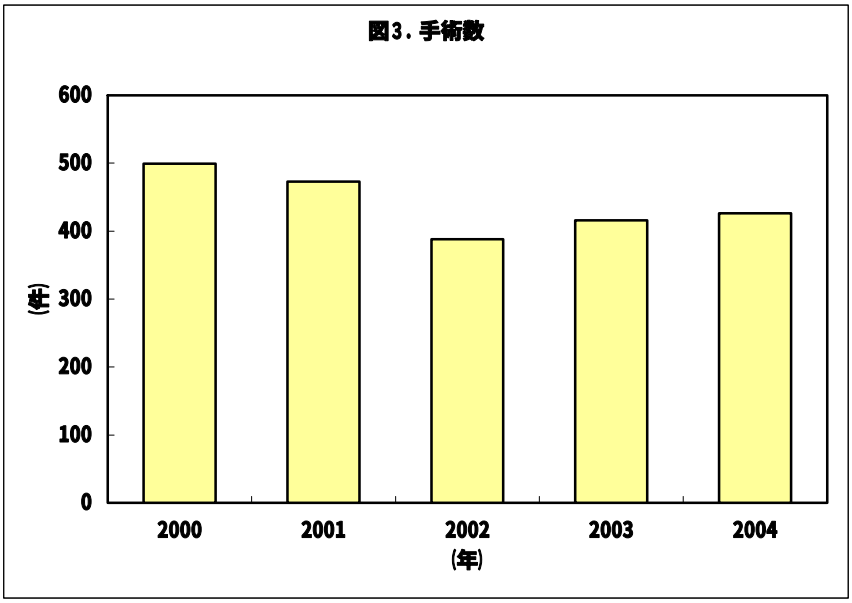


一方、2004 年の入院患者数は 513 名､うち新生児入院数 19 名であった(図２)。



2. 手術

2004 年の手術数は 426 件、うち新生児手術数は 10 件であった(図３)。



Ⅳ　研究業績

1.　論文発表

「原著」

1) （補遺）Tomomasa T, Kobayashi A, Kaneko H, Mika S, Maisawa S, Chino Y, Syou H, Yoden A, Fujino J, Tanikawa M, Yamashita T, Kimura S, Kanoh M, Sawada K, Morikawa A. Granulocyte absorptive apheresis for pediatric patients with ulcerative colitis. Dig Dis Sci 48:750-754,2003.
2) Ikeda H, Yamamoto H, Fujino J, Kisaki Y, Uchida H, Ishimaru Y, Hasumi T, Hamajima A. Umbilicoplasty for large protruding umbilicus accompanying umbilical hernia: A simple and effective technique. Pediatr Surg Int 20:105-107,2004.
3) Ikeda H, Ishimaru Y, Takayasu H, Okamura K, Kisaki Y, Fujino J. Laparoscopic versus open appendectomy in children with uncomplicated and complicated appendicitis. J Pediatr Surg 39:1680-1685,2004.
4) Yamada S, Ohira M, Horie H, Ando K, Takayasu H, Suzuki Y, Sugano S, Hirata T, Goto T, Matsunaga T, Hiyama E, Hayashi Y, Ando H, Suita S, Kaneko M, Sasaki F, Hashizume K, Ohnuma N, Nakagawara A. Expression profiling and differential screening between hepatoblastomas and the corresponding normal livers: Identification of high expression of the PLK1 oncogene as a poor-prognostic indicator of hepatoblastomas oncogene. Oncogene 23:5901-5911,2004.
5) 設楽利二、清水宏之、嶋田　明、黒岩　実、鈴木則夫、畠山信逸、平戸純子、池田　均、土田嘉昭：肺転移をきたしたStage Ⅰ Wilms腫瘍の一例における診断上の問題点の検討。小児がん 41:870-874,2004.

「症例報告」

1) （補遺）安藤昌守、大島乃里子、佐々木奈奈、根岸秀明、星本和種、浜田佳伸、友部勝実、矢追正幸、堀中俊孝、榎本英夫、林　雅敏、大藏健義、内田広夫、池田　均：出生前臀部腫瘤と思われた腹壁破裂の１例。日本産科婦人科学会埼玉地方部会誌 33:20-23,2003.
2) Fujino J, Yamamoto H, Kisaki Y, Ishimaru Y, Uchida H, Ikeda H, Mori Y, Nozaki M: Epidermoid cyst: Rare testicular tumor in children. Pediatr Radiol 34:172-174,2004.
3) Uchida H, Yamamoto H, Kisaki Y, Fujino J, Ishimaru Y, Ikeda H. D-Lactic acidosis in short-bowel syndrome managed with antibiotics and probiotics. J Pediatr Surg 39:634-636,2004.
4) Yamamoto H, Tsuchiya T, Ishimaru Y, Kisaki Y, Fujino J, Uchida H, Yoshida M, Mori Y, Ikeda H. Infantile intestinal leiomyosarcoma is prognostically favorable despite histologic

aggressiveness: Case report and literature review. J Pediatr Surg 39:1257-1260,2004.

5) 岡邨香織、石丸由紀、木崎義行、大谷祐之、高安　肇、池田　均：気管支異物を疑わせた気管支狭窄病変の１例。第 93 回東京小児外科研究会抄録集 33:35,2004.

6) 山本英輝、石丸由紀、木崎義行、岡邨香織、高安　肇、池田　均：経過中に２度の破裂をきたした外傷性膵仮性嚢胞の１例。日小外会誌 40:681-686,2004.

7) 高安　肇、木崎義行、石丸由紀、岡邨香織、池田　均：乳児期に発症した巨大嚢胞型先天性胆道拡張症の１例。日小外会誌 40:708-712,2004.

8) 岡邨香織、石丸由紀、木崎義行、大谷祐之、高安　肇、池田　均、森　吉臣：小児期に発症し若年で胆嚢摘出術を施行した胆嚢腺筋腫症の１例。日小外会誌 40:713-717,2004.

9) 大谷祐之、山岸純子、石丸由紀、高安　肇、池田　均：腸回転異常症を合併した 13 トリソミーの１例。第 94 回東京小児外科研究会抄録集 34:4-6,2004.

「著書・総説・その他」

1) 池田　均：「症候編、全身症候、外傷」、今日の小児診断指針、第４版（五十嵐隆、大薗恵一、高橋孝雄、編集）、医学書院、東京、2004、pp128-130.

2) 石丸由紀、木崎義行、岡邨香織、藤野順子、高安　肇、池田　均、星本和種、濱田佳伸、矢追正幸、堀中俊孝、林　雅敏、大蔵健義、富田祐造、小幡一夫、永井敏郎：出生前診断及び母体搬送された新生児外科症例の検討。越谷市医師会会報、No.42、2004、pp25.

3) 森川康英、土田嘉昭、原　純一、太田　茂、細井　創、池田　均、正木英一、牧本　敦、草深竹志、金子道夫、林　富：横紋筋肉腫に対する治療プロトコール：化学療法レジメンと放射線治療および外科治療ガイドライン。小児外科 36:939-946,2004.

2. 学会・研究会への参加

「口演発表」

1) （補遺）鈴木　信、、高橋　篤、増田典弘、宮崎達也、黒岩　実、鈴木則夫、加藤広行、浅尾高行、土田嘉昭、池田　均、桑野博行：小児肝芽腫におけるβcatenin、GSK-3β及び Cyclin D1 の免疫組織学的検討。第 103 回日本外科学会総会、2003.6.4-6、札幌

2) （補遺）中井秀郎、石丸由紀、池田　均、浅沼　宏、宍戸清一郎、安田耕作：尿生殖洞遺残、低形成膀胱を合併した Mayer-Rokitansky 症候群に対する一期的腟・尿路再建術。第 12 回日本小児泌尿器科学会、2003.7.2-4、神戸

3) 高安　肇、木崎義行、石丸由紀、岡邨香織、池田　均：Morgagni ヘルニアに対する腹

腔鏡下根治術(Azzie 法)の経験。第 12 回クリニカル・ビデオフォーラム、2004.2.14、東京

4) 岡邨香織、木崎義行、石丸由紀、高安　肇、池田　均、黒岩　実、鈴木則夫、嶋田　明、設楽利二、土田嘉昭：Wilms 腫瘍再発 2 症例の治療経験。第 1 回日本ウィルムス腫瘍スタディー(JWiTS)研究会、2004.2.21、東京

5) 高安　肇、石丸由紀、岡邨香織、池田　均：自家脾移植を施行した遊走脾の一例。第 17 回日本小児脾臓研究会、2004.2.28、横浜

6) 岡邨香織、荒木　修、木崎義行、大谷祐之、藤野順子、石丸由紀、高安　肇、池田　均：局所再発のため脾摘を行った Wilms 腫瘍の 1 例。第 17 回日本小児脾臓研究会、2004.2.28、横浜

7) 岡邨香織、石丸由紀、荒木　修、木崎義行、大谷祐之、高安　肇、池田　均：直腸炎型で発症した難治性の慢性持続型潰瘍性大腸炎の 1 例。第 4 回日本小児 IBD 研究会、2004.2.29、東京

8) 岡邨香織、石丸由紀、荒木　修、木崎義行、大谷祐之、高安　肇、池田　均、森　吉臣：繰り返す右季肋部痛を主訴に胆嚢腺筋症の診断で胆嚢摘出術を行った 1 例。第 792 回外科集談会、2004.3.6、東京

9) 高安　肇、池田　均、内田広夫：肝芽腫発生における活性酸素障害と Wnt シグナル異常。第 8 回群馬小児がん研究会、2004.3.12、前橋

10) 大谷祐之、高安　肇、石丸由紀、岡邨香織、池田　均：巨大な乳児孤立性肝嚢胞の 1 例。第 13 回関東小児外科症例検討会、2004.3.13、東京

11) 高安　肇、池田　均、内田広夫：肝芽腫発生における活性酸素障害と Wnt シグナル異常。第 76 回小児血液腫瘍懇話会、2004.3.17、東京

12) 池田　均、石丸由紀、岡邨香織、木崎義行、藤野順子、高安　肇：小児における腹腔鏡下虫垂切除術の適応。第 104 回日本外科学会定期学術集会、2004.4.7-9、大阪

13) 市花久美子、坂井真由美、古澤理恵、小倉裕美子、関根　望、鈴木　愛、山浦由美子、芦野道子、福田裕美、佐藤澄子：順行性洗腸路ストーマ増設術を受けた 4 歳児への関わり－二分脊椎症患児の事例を通して－。第 18 回日本小児ストーマ・排泄管理研究会、2004.5.8、大宮

14) 石丸由紀、木崎義行、岡邨香織、大谷祐之、藤野順子、高安　肇、池田　均：胃食道逆流症(GERD)に対する外科的治療の選択。第 41 回日本小児外科学会総会、2004.6.2-4、大阪

15) 高安　肇、岡邨香織、木崎義行、石丸由紀、池田　均：自家脾移植を施行した遊走脾の 1 例。第 41 回日本小児外科学会総会（ビデオ演題）、2004.6.2-4、大阪

16) 大谷祐之、荒木　修、木崎義行、岡邨香織、藤野順子、石丸由紀、高安　肇、池田　均：腹腔鏡手術の経験とその安全性。第 41 回日本小児外科学会総会、2004.6.2-4、大阪
17) 岡邨香織、大谷祐之、木崎義行、藤野順子、石丸由紀、高安　肇、池田　均、高橋　篤、桑野博行：会陰または肛門周囲原発横紋筋肉腫－特に外科治療について－。第 41 回日本小児外科学会総会、2004.6.2-4、大阪
18) 木崎義行、荒木　修、岡邨香織、大谷祐之、藤野順子、石丸由紀、高安　肇、池田　均：小児鼠径ヘルニア嵌頓症例の臨床的検討。第 41 回日本小児外科学会総会、2004.6.2-4、大阪
19) 内田広夫、岩中　督、西　明、川嶋　寛、工藤寿美、佐竹亮介、岸本宏志、池田　均、田口智章：年長児および成人にみられる hypoganglionosis の診断と特徴。第 41 回日本小児外科学会総会、2004.6.2-4、大阪
20) 大谷祐之、池田　均、高安　肇、石丸由紀、山岸純子：腸回転異常症を合併した 13 トリソミーの 1 例。第 94 回東京小児外科研究会、2004.6.15、東京
21) 池田　均、土田嘉昭、森川康英：シンポジウム「各種の癌に対する治療法：エビデンスと成績：小児」、横紋筋肉腫の外科治療：エビデンスづくりのためのグループスタディの役割。第 29 回日本外科系連合学会学術集会、2004.7.2-3、東京
22) 大谷祐之、奈良橋健、荒木　修、岡邨香織、石丸由紀、高安　肇、池田　均、野崎美和子：小児外科領域における MDCT を用いた三次元イメージングの有用性。第 29 回日本外科系連合学会学術集会、2004.7.2-3、東京
23) 中井秀郎、山下高久、鈴木常貴、北原聡史、石丸由紀、池田　均、浅沼　宏、宍戸清一郎、安田耕作：神経因性膀胱、続発性 VUR を合併した先天性陰茎無発生の幼児に対する一期的造膣・尿路再建・肛門形成術。第 13 回日本小児泌尿器科学会総会、2004.7.9-10、大阪
24) 大谷祐之、石丸由紀、高安　肇、山岸純子、池田　均：小児腹腔鏡手術の経験。第 6 回越谷市医師会学術集会、2004.7.10、越谷
25) 石丸由紀：ラットの肝細胞を用いた肝悪性腫瘍の発生機序の解明のための実験。平成 15 年度「獨協医科大学研究助成金・研究奨励賞」研究成果報告会、2004.7.12、壬生
26) 山岸純子、石丸由紀、高安　肇、大谷祐之、池田　均：腫瘍破裂による腹痛で発症した卵巣原発卵黄嚢腫瘍の 1 例。第 9 回群馬小児がん研究会、2004.8.27、前橋
27) Takayasu H, Uchida H, Ishimaru Y, Ikeda H. Oxidative DNA damage and β-catenin status under hypoxia-hyperoxia stresses in newborn rat hepatocytes. The 36th congress of the International Society of Paediatric Oncology, September 16-19,2004, Oslo, Norway
28) 山岸純子、石丸由紀、高安　肇、大谷祐之、池田　均：肥厚性幽門狭窄症における臍上

部弧状（臍輪）切開法の検討。第 794 回外科集談会、2004.9.18、東京

29) Ikeda H, Ishimaru Y, Takayasu H, Okamura K, Otani Y, Kisaki Y, Fujino J. Laparoscopic versus open appendectomy in children with uncomplicated and complicated appendicitis. The 36th Congress of the Italian Society of Pediatric Surgery, September 24-26,2004, Rome, Italy

30) 山岸純子、石丸由紀、大谷祐之、高安　肇、池田　均：肛門管重複症をともなう肛門狭窄の 1 例。第 14 回関東小児外科症例検討会、2004.9.25、東京

31) 小倉裕美子、木村美寿々、山本悦子、鈴木　愛、山浦由美子、福田裕美、佐藤澄子：思春期患者における排泄自己管理を含めた自立への支援。第 15 回日本小児外科 QOL 研究会、2004.10.11、福岡

32) 大谷祐之、山岸純子、石丸由紀、高安　肇、池田　均：上皮性マーカーの上昇をともなう巨大な乳児の孤立性非寄生虫性肝嚢胞(SNPCL)の 1 例。第 39 回日本小児外科学会関東甲信越地方会、2004.10.30、東京

33) 山岸純子、石丸由紀、高安　肇、大谷祐之、池田　均：新生児女児傍尿道嚢胞の 1 例。第 39 回日本小児外科学会関東甲信越地方会、2004.10.30、東京

34) 高安　肇、石丸由紀、内田広夫、池田　均：新生児ラット肝細胞初代培養を用いた未熟児肝芽腫発生メカニズムの研究。第 20 回日本小児がん学会、2004.11.21-22、京都

35) 土田嘉昭、森川康英、秦　順一、細井　創、原　純一、太田　茂、池田　均、正木英一、岸本誠司、熊谷昌明、花田良二：横紋筋肉腫の集学的治療に関する研究。第 20 回日本小児がん学会、2004.11.21-22、京都

36) 大谷祐之、山岸純子、石丸由紀、高安　肇、池田　均：孤立性非寄生虫性肝嚢胞(SNPCL)に対する嚢胞開窓術。第 24 回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会、2004.11.25-26、神戸

37) 石丸由紀、山岸純子、大谷祐之、高安　肇、池田　均：肛門管重複症をともなう肛門狭窄の 1 例。第 61 回直腸肛門奇形研究会、2004.11.25-26、神戸

38) Otani Y, Takayasu H, Ishimaru Y, Okamura K, Yamagishi J, Ikeda H. Secretion of epithelial markers supports biliary origin of solitary non-parasitic cyst of the liver in infancy. The 19th Congress of the Asian Association of Pediatric Surgeons, November 28-December 1,2004, Hong Kong

39) 石丸由紀、大谷祐之、山岸純子、高安　肇、池田　均：胃食道逆流症(GERD)に対する外科的治療の選択。第 32 回獨協医学会、2004.12.4、壬生

40) 高安　肇、山岸純子、畑中政博、大谷祐之、石丸由紀、鈴木伸志、水田耕一、河原崎秀雄、池田　均：10 カ月時に生体肝移植を余儀なくされた胆道閉鎖症術後難治性胆管炎の一例。胆道閉鎖症研究会、2004.12.4、鹿児島

41) 高安　肇、大谷祐之、石丸由紀、山岸純子、池田　均：共通管内結石を有し膵炎を発症した胆石症の 1 例。第 95 回東京小児外科研究会、2004.12.7、東京

42) 山岸純子、山本英輝、石丸由紀、高安　肇、大谷祐之、池田　均：外傷性膵仮性嚢胞の 1 例。第 95 回東京小児外科研究会、2004.12.7、東京

「症例提示」

1) 大谷祐之：症例提示(11 カ月、男児、肝嚢胞)、第 38 回埼玉県小児外科症例検討会、2004.5.11、さいたま

2) 山岸純子：皮膚洞（肛門管重複症？）をともなう肛門狭窄の 1 例。第 39 回埼玉県小児外科症例検討会、2004.11.16、さいたま

「座長・当番幹事」

1) 池田　均：第 4 回日本横紋筋肉腫研究会、「セッション II」座長、2004.1.24、東京

2) 池田　均：日本小児肝癌スタディグループ(JPLT)研究会 2004、「腫瘍マーカー」座長、2004.1.30、東京

3) 池田　均：肝胆膵症例セミナー、「症例 II」座長、2004.1.30、さいたま

4) 池田　均：第 8 回群馬小児がん研究会、当番幹事、2004.3.12、前橋

5) 高安　肇：第 76 回小児血液腫瘍懇話会、「一般演題」座長、2004.3.17、東京

6) 池田　均：第 18 回日本小児ストーマ・排泄管理研究会、「一般演題 II：瘻孔管理・スキンケア」、2004.5.8、大宮

7) 池田　均：第 38 回埼玉県小児外科症例検討会、当番幹事 2004.5.11 さいたま

8) 池田　均：第 41 回日本小児外科学会総会、「一般口演：新生児」座長、2004.6.4、大阪

9) 池田　均：第 29 回日本外科系連合学術集会、示説「小児外科その他」座長、2004.7.2、東京

10) 池田　均：第 20 回日本小児がん学会、要望演題「神経芽腫マス・スクリーニング休止後を考える」座長、2004.11.21、京都

3. 研究助成

1) 平成 16 年度科学研究費、「低出生体重児における肝芽腫発生の機序に関する研究」、1,300,000 円(研究者代表者、池田　均)

4. 学位　該当者なし

Ⅴ　教育関連の活動

1.　学生実習

2004年度から医学部５年生を対象としたBedside Learning(BSL)を越谷病院の全診療科が担当することとなった。従来、BSLは心臓血管外科と小児外科の両科が担当してきたが、他科も学生教育に参加したいとの強い希望があり、池田が臨床実習委員会（壬生）の席上で提案し実現したものである。したがって、学生はグループ毎に各診療科へ配属され、実習をうけることとなった。

BSL自体の内容は従来どおりである。診療参加型のBSLとすべく、朝８時30分のミーティングから診療終了時刻まで学生は担当医とともに過ごした。担当医は病歴聴取、診察、検査、手術(術前準備から術後管理まで)、診療記録の記載などの基本とその実際を指導した。学生は可能な限り緊急手術にも立ち会い、回診、カンファレンス、症例検討会、セミナーなどを通じ小児外科疾患の病態、診断、治療に関する基本的知識が得られるよう、さらにチーム医療の実際を体験できるよう配慮した。学生には個別にテーマを与え、学習した内容を短時間でプレゼンテーションする機会も与えた。

2.　卒後臨床研修

2004年度から開始された新臨床研修制度により、１年目の研修医11名（26名中の42%）が小児外科で１カ月間の臨床研修を行った。小児外科は心臓血管外科、脳神経外科とともに選択外科系(1)コースの選択科目である。研修は越谷病院臨床研修プログラムに従い実施された。

3.　講演・講義

1)　高安　肇：「膵管胆道合流異常と先天性胆道拡張症」、第8回肝胆膵症例セミナー、2004.1.30、さいたま

2)　池田　均：「小児急性腹症の診断と治療」、第3回埼玉東部第二地区小児臨床医療研究会、2004.5.13 、春日部

3)　池田　均：「消化管の発生と小児外科」、獨協医科大学講義(2年生)「消化・吸収・栄養の科学：腹部領域の小児外科」、2004.6.8、壬生

4)　池田　均：「小児悪性固形腫瘍の分子病態と治療」、群馬大学医学部平成16年度実践臨床病態学講義(6年生)、2004.6.11、前橋

5)　池田　均：「周産期医療と小児外科」、埼玉県東部ブロック産婦人科勉強会、2004.11.15、越谷

4. セミナーの開催

小児外科および関連領域の最新の情報を得ることを目的に、院内外の医師、看護師、コメディカル、学生を対象に小児外科・周産期外科セミナーを開催した。実施セミナーは以下のとおりである。

尚、第 22 回小児外科・周産期外科セミナーは獨協医科大学越谷病院看護部および同褥創対策委員会との共催で開催された。

1) 第 18 回小児外科・周産期外科セミナー
   講師：東京家政学院大学・前昭和大学小児科教授、小林昭夫先生
   演題：「小児の炎症性腸疾患の特性と治療戦略－潰瘍性大腸炎を中心に－」
   2004.2.17、獨協医科大学越谷病院
2) 第 19 回小児外科・周産期外科セミナー
   講師：都立清瀬小児病院副院長・同新生児科、西田　朗先生
   演題：「新生児・水棲動物から陸棲動物へ」
   2004.4.16、獨協医科大学越谷病院
3) 第 20 回小児外科・周産期外科セミナー
   講師：越谷市立病院小児科部長、大日方薫先生
   演題：「小児救急疾患－診療のポイント」
   2004.6.29、獨協医科大学越谷病院
4) 第 21 回小児外科・周産期外科セミナー
   講師：草加市立病院小児科部長、土屋史郎先生
   演題：「小児心疾患の管理」
   2004.9.7、獨協医科大学越谷病院
5) 第 22 回小児外科・周産期外科セミナー
   講師：日本看護協会看護研修学校、溝上祐子先生
   演題：「これからの創傷管理：創傷治癒過程に応じたドレッシング剤の選択」
   2004.11.19、獨協医科大学越谷病院
   共催：獨協医科大学越谷病院看護部・褥創対策委員会

5. 小児外科・病理カンファレンス

小児外科と病理のカンファレンスを随時、開催した。

1) 第 11 回小児外科・病理カンファレンス、2004.2.27
   (1) 2 歳、女児、後頭部腫瘤、悪性リンパ腫

(2) 1 歳、男児、後頭部腫瘤、静脈瘤

(3) 6 歳、男児、甲状舌管嚢胞

(4) 12 歳、男児、甲状舌管嚢胞

(5) 5 歳、男性、甲状舌管嚢胞

(6) 7 歳、女児、遊走脾

(7) 4 歳、女児、大腿部腫瘤、反応性リンパ節炎

(8) 2 カ月、男児、イレウス、回腸絞扼

(9) 1 カ月、女児、先天性胆道拡張症

2) 第 12 回小児外科・病理カンファレンス、2004.5.28

(1) 18 日、女児、傍尿道嚢胞、Skene duct cyst

(2) 11 カ月、男児、孤立性肝嚢胞

(3) 5 歳、女児、回腸重複症

(4) 4 歳、男児、ヒルシュスプルング病

(5) 1 歳、女児、側頚嚢胞

(6) 2 歳、女児、甲状舌管嚢胞

(7) 20 日、女児、新生児仮性腸閉塞

(8) 25 日、男児、ヒルシュスプルング病

3) 第 13 回小児外科・病理カンファレンス、2004.7.23

(1) 14 歳、男児、精巣捻転

(2) 1 カ月、男児、精巣捻転

(3) 2 歳、男児、精巣奇形腫（成熟型）

(4) 13 歳、女児、気胸

(5) 3 カ月、男児、ヒルシュスプルング病

4) 第 14 回小児外科・病理カンファレンス、2004.12.17

(1) 13 歳、女児、卵巣卵黄嚢腫瘍

(2) 5 歳、男児、縦隔気管支原性嚢胞

(3) 5 日、女児、ヒルシュスプルング病

(4) 4 カ月、男児、低位鎖肛（肛門狭窄）、肛門重複症疑い

(5) 5 歳、女児、正中頚嚢胞

(6) 7 歳、女児、先天性梨状窩瘻

(7) 20 歳、男性、胸壁血管奇形

(8) 4 カ月、男児、腹満

(9) 2 日、女児、回腸多発閉鎖症

(10) 5 歳、女児、胆石症、慢性胆嚢炎

(11) 20 日、男児、後腹膜奇形腫（未熟型）

6. 抄読会

2004 年は 37 回(抄読論文数 82)の抄読会を行った。

VI　その他

「寄稿」

1) 池田　均：「からだの質問箱：腸回転異常症」。2004.5.9、読売新聞朝刊

2) 池田　均：「あとがき」。日小外会誌、40(1),2004.

3) 池田　均：「あとがき」。日小外会誌、40(2),2004.

4) 池田　均：「あとがき」。日小外会誌、40(4),2004.

5) 池田　均：「あとがき」。日小外会誌、40(5),2004.

6) 池田　均：「あとがき」。日小外会誌、40(6),2004.

7) 池田　均：「あとがき」。日小外会誌、40(7),2004.

編集後記

和辻哲郎著「イタリア古寺巡礼」の中に興味深い記述を見つけた。発掘家メンガレリ氏から昼食をご馳走になった際のはなしで、「牛の脳のフライが出て、しきりにお代わりをすすめられたには、少しまいった」とある。1928 年（昭和３年）２月、ローマ滞在中の出来事である。BSE の騒ぎ以来、気にはなっていたのだが、あらためて牛の脳は食用に供されるのだと知って驚いた。そこでインターネットを検索してみると確かにある。「食育大事典」（日本食品薬化株式会社）のホームページに「ブレンズ：牛の脳、ビタミンＣの含有量はレバーの次に豊富で、煮込み、炒め物の他、フライや鍋料理にも適している」とある。牛の腎臓ならホテルの昼食メニューで食べたことがあるが、脳は美味しいのだろうか。

世の中、知らないこと、不思議なこと、訳のわからないこと、数々である。医学も然りである。興味のつきる暇がなく時間はいくらあっても足りない。そういえば、昔、先輩に連れていかれた下手物屋で牛の精巣の刺身を出されたことがある。丁重にお断りし口をつけなかったことを憶えている。

(池田)

獨協医科大学越谷病院小児外科のあゆみ　2004 年

平成 17 年 3 月 31 日発行
編集・発行　獨協医科大学越谷病院小児外科
〒343-8555　埼玉県越谷市南越谷 2-1-50
TEL 048-965-1111(内線 2600)
印刷所　(株)松井ピ・テ・オ・印刷
TEL 028-662-2511(代)